

日本文学新史

現代

編 泉 長谷川

私はあわてて袂から煙草を取出した。

踊子がまた連れの女の前、煙草盆を引寄せて私に近くしてくれた。

やつぱり私は黙つてゐた。

踊子は十七くらゐに見えた。

私には分らない古風の不思議な形に大きく髪

それが卵形の麗々しい顔を非常に

髪を豊かに誇張して描いた

稗史的な娘の給

やうな感じだつ

踊子の連れは四十代の女が一人

若い女が二人、ほかに長岡温

宿屋の印半纏を着た二十五六の男

私はそれまでにこの踊子たちを

二度見てゐるのだつた。

最初は私が湯ヶ島へ来る途中、

修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出會つた。

その時は若い女が三人たつた。

踊子は太鼓を提げてゐた。

日本文学新史

現代

長谷川 泉編

至文堂

目次——現代

序章 顕著な国際的視野の拡大	長谷川 泉
	11

第一章 芸術的近代派	千葉宣一
	17

一 前衛芸術の国際的波動	17
--------------	----

1 関東大震災の文学的衝撃	17
---------------	----

2 前衛芸術運動の諸相	18
-------------	----

未来派の導入……19／立体派の伝播……22／表現派の衝撃……	
--------------------------------	--

22／ダダイズムの洗礼……23／構成派の移植……24／シュールレアリスムの航跡……25	
---	--

--	--

二 新感覚派の成立と展開	28
--------------	----

三 新興芸術派の運命	30
------------	----

四 新心理主義文学の史的動態	34
----------------	----

第二章 プロレタリア文学	高橋 春雄
	36

一	背景と範疇——語彙の成立をめぐる……	36
二	『種蒔く人』から『文芸戦線』へ……	40
三	分離・結合の行方——三派鼎立期……	45
四	運動の高揚と作品の開花——二派並立期……	48
五	終焉、その後……	51

第三章 十五年戦争下の文学

吉田 永宏……56

一	マルクス主義文学運動の崩壊……	56
	エポックとしての満州事変……56／作家同盟の解散と分散	
	化……58／転向文学……59／中野重治と宮本百合子……60／プ	
	ロレタリア作家の作品……61	
二	〈文芸復興〉とその周辺……	62
	小林秀雄の登場……62／『文学界』の創刊……62／『文学	
	界』の位置づけ……63／小林秀雄の『私小説論』……65	
三	昭和十年代の文学……	65
	開花と成熟の時期……65／『日本浪漫派』と『人民文庫』	
	……66／文学者の戦争協力……66	

第四章 近代の超克

磯貝英夫……68

- 一 「近代の超克」座談会……………68
- 二 戦後における「近代の超克」論議……………72

第五章 実存主義

柘植光彦……77

- 一 実存主義の流行……………77
- 二 なぜ解釈が多様化したか……………78
- 三 基本的な定義……………79
- 四 戦後文学の実存主義的傾向……………80
- 五 椎名麟三の軌跡……………82
- 六 埴谷雄高・野間宏・その他……………83

第六章 占領下の文学

大屋幸世……85

- 序章……………85

- 一 その文学活動……………85

- 1 雑誌の復刊、創刊……………85

- 2 大家の活躍……………86

3 無頼派の作家たち……………87

4 既成作家たち……………88

5 評論家たち……………89

二 占領期への視点……………90

1 無条件降伏論争……………90

2 検閲……………91

第七章 戦後派文学(第二次・第二次) — 荻久保泰幸……………93

一 戦後派文学の担い手……………93

戦後派新人の登場……………93／戦後派文学の新人たち……………95／

『近代文学』の人々……………96／アブレ・ゲール……………98／『世

代』の人々……………100／第二の新人……………100

二 戦後派文学……………102

戦後派文学とは何か……………102／戦後派文学の特質……………104／戦後

派文学の代表作……………106／戦後派文学の系譜……………105

第八章 民主主義文学 — 関口安義……………109

一 民主主義文学の誕生……………109

二	初期民主主義文学の歩み	112
三	政治と文学	116
四	国民文学への期待	120

第九章 第三の新人・その他多極化現象 ————— 渡部芳紀 122

一	第三の新人の登場	122
二	第三の新人の特徴	123
三	マスコミの発達と中間小説、 大衆小説の盛行	126
四	石原慎太郎、大江健三郎、開高健の登場	127
五	『人間として』によった人々	128
六	女流作家の活躍	129
七	在日朝鮮人作家たち	130
八	「内向の世代」の作家たち	130

第十章 海外との交流 ————— 武田勝彦 132

一	交流史の方法論	132
二	現代小説に投影した海外の文学	133

1	英米文学……………	133
---	-----------	-----

2	フランス文学……………	136
---	-------------	-----

3	ドイツ文学……………	137
---	------------	-----

4	ロシア文学……………	138
---	------------	-----

三	現代戯曲に投影した海外の文学……………	139
---	---------------------	-----

四	現代詩に投影した海外の文学……………	139
---	--------------------	-----

五	日本文学の海外への紹介……………	141
---	------------------	-----

1	一般的傾向……………	141
---	------------	-----

2	文学史・概論……………	141
---	-------------	-----

3	研究書……………	142
---	----------	-----

4	個人作家研究と評伝……………	144
---	----------------	-----

第十一章

方法論

——創作主体への溯及と享受主体の復権——

高橋 新太郎……………145

一	文献学的国文学の出發……………	145
---	-----------------	-----

二	「文芸」学への模索……………	147
---	----------------	-----

三	方法的現在と「踏絵」としての文学史……………	150
---	------------------------	-----

第十二章

演劇

野村 喬……………153

一	若き演劇人の新時代への対応	153
二	戦争下の専門演劇人たち	157
三	占領下から独立への「民主化」時期の劇界	159
四	爛熟氾濫する演劇の無焦点状況	163

第十三章 詩

飛 高 隆 夫 …… 167

一	現代詩の幕開け	167
二	プロレタリア詩の成立	167
三	昭和の新詩運動	168
四	宮沢賢治など	170
五	昭和の抒情詩 I	170
六	昭和の抒情詩 II	172
七	戦時下の抵抗詩	173
八	大太平洋戦争の勃発	173
九	戦後詩の出発	174
十	既成詩人の動向	175
十一	戦後詩の形成	176
十二	戦後派詩人の登場	177

十三 言語の自己増殖	179
------------	-----

第十四章 短歌

篠

弘
180

序 短歌史における「昭和」	180
一 新興短歌運動の波紋（昭和初年代まで）	181
二 戦地詠と『新風十人』（昭和十年代）	183
三 戦後派の運動（昭和二十年代）	186
四 前衛短歌の興隆（昭和三十年代）	189
終わりに 昭和四十年代以降へ	192

第十五章 俳句

沢木欣一
194

一 子規の俳句革新	194
二 碧梧桐と新傾向	195
三 虚子と花鳥諷詠	196
四 秋桜子・誓子と新興俳句	198
五 人間探求派	200
六 戦後俳壇の再編成	200
七 社会性俳句・前衛俳句	203

第十六章 児童文学

鳥越 信 206

一	はじめに	206
二	現代児童文学の分岐点	206
三	未明伝統の形成と克服	208
1	冬の季節とプロレタリア児童文学	210
2	「少年倶楽部」と大衆的児童文学	213
3	生活童話	214
4	戦中児童文学の教訓	216
四	おわりに	218
参考文献		220
解題		229
年表		238
索引		251

表紙は根岸敬画「伊豆の踊子」部分

凡 例

本文中にゴシックで表示した書誌・人名・事項は「参考」として採りあげ、解説を付したものを示す。

本文中の引用文献は、括弧中に、その著者名と書名又は論文名と文献番号を表示した。番号により、本文末尾に一括掲載した「参考文献」欄を照合すると、書名・著者名・発行所・発行年月がわかるように工夫した。

執 筆 者 紹 介 (掲載順)

長谷川 泉(はせがわ・いずみ)
学習院大学講師

千葉宣一(ちば・せんいち)
帯広畜産大学教授

高橋春雄(たかはし・はるお)
大東文化大学教授

吉田永宏(よしだ・ながひろ)
関西大学教授

磯貝英夫(いそがい・ひでお)
広島大学教授

柘植光彦(つげ・てるひこ)
専修大学教授

大屋幸世(おおや・ゆきよ)
鶴見大学教授

荻久保泰幸(おぎくぼ・やすゆき)
国学院大学教授

関口安義(せきぐち・やすよし)
都留文科大学教授

渡部芳紀(わたべ・よしのり)
中央大学教授

武田勝彦(たけだ・かつひと)
早稲田大学教授

高橋新太郎(たかはし・しんたろう)
学習院女子短期大学教授

野村 喬(のむら・たかし)
演劇評論家

飛高隆夫(ひだか・たかお)
大妻女子大学教授

篠 弘(しの・ひろし)
歌人・評論家

沢木欣一(さわき・きんいち)
俳人・東京芸術大学教授

鳥越 信(とりごえ・しん)
大阪国際児童文学館総括専門員

平山三男(ひらやま・みつお)
関東学院大学講師

序章 顕著な国際的視野の拡大

長谷川 泉

日本は歴史的に見て、外来文化の摂取に極めて積極的であった。そして、そのことを土台として独自の文化風土を開発した。そのことの象徴的な濫觴に、文字の問題がある。

元来、日本には固有の文字がなかった。中国から入った漢字が最初の文字であった。四―五世紀のことである。この漢字を独創的に改変したのが仮名であった。漢字を真名（まな、本当の文字）と呼び、それに対して仮名（かな、かりな、不完全な文字）と呼んだ背景が、当時の日本人の意識構造の一端を示している。

仮名には（一）万葉仮名（二）片仮名（三）平仮名があった。表音・表意の両機能を持つ漢字を、表音文字として固定する経緯に、日本人の独創が認められる。現在の日本語は、漢字と仮名のまぜ書きから成り立っている。

外来文化の積極的摂取の姿勢は、大きな犠牲を払った遭随

使、遣唐使の派遣にも示されている。先進文化への熱いまなざしと憧憬がなければ、往復路、不安定な海路の長途の難破の危険に耐える方策はとり得なかったであろう。

徳川家康による江戸幕府の開始（二六三）、そして鎖国（二六五）から明治維新（二八六）までの約三百年は、文化的閉鎖状態にあった。しかし和蘭と中国は、鎖国下にあっても、文化的、そして特に経済的には、一種の通風孔の役割を果たした。地理的条件もあって、日本は平和を享受し、外国の植民地支配の魔手を逃れ、固有の日本文化を育成・爛熟させた。

鎖国のメリット・デメリットは、和辻哲郎らを初め、さまざまに論じられた。幕末の攘夷・開国の角逐や、明治維新後の狂騒的な欧化二辺倒、鹿鳴館の悲劇は、鎖国時代の物心両面の根の深さを物語るものであった。

文明開化への一応の国論の統一がなされ、精神面でも社会

面でも、調和的平衡が可能になったところでの、転形期の蕩揺が起こった現象は、次のように辿られる。

一九一四—一八年 第一次世界大戦

一九一七年 ロシア革命

一九二三年 関東大震災

一九二九—三二年 世界的規模の経済恐慌 プロレタリアートの増大

第一次世界大戦によって、全世界的規模での社会的、文化的変革が行われた。ロシア革命は、年代的にもその中に包摂されている。中央集権的統一国家の首都としての東京が、関東大震災によって懐滅的打撃を受けたことは、京浜地区という一地域のみに止まらず、一国規模での変革を余儀なくされたことになる。近代と現代の接点で、その辺に設定されることとの意義は、まさしく上述の帰結として認められるのである。安定の基盤がくつがえされることによって、旧套を打破して革命・変革・再建が計られると共に、変革に伴う浮薄で無神経な安普請の要素も混在することになったのは、時代の趨勢であった。

革命の文学（第四階級の文学やプロレタリア文学）と文学の革命（芸術的近代派）という、航跡を異にする文学が台頭した

のは、時代の趨勢であった。芸術様式の衝撃的変革を意図したマリネッティの「未来派宣言」（一九〇九・ニ・二〇）「ル・フィガロ」は、極めて同時代的に森鷗外が、同年いち早く「スバル」（明治四二・五）の「椋鳥通信」で翻訳・紹介したところである。マルクスとエンゲルスによる「共産党宣言」の発表は一八四八年であり、マルクス主義文学も、また芸術的近代派の中核になった新感覚派の文学も、外来文学理論の強い影響下に展開されたものであった。

情報伝達のメディアが発達したことで、世界的視圈に目を注いで、めばしい動向を撰取・吸収する意欲が旺盛となったことなどから、外来文化の外来性が稀薄になったことは否めない。同時代的移植・移入や紹介の作業が、一方交通的であることは、冒頭に述べた歴史的特性を物語るもので、現代文学の一つの特徴と言うことができる。その一方交通性は正され、軌道修正されれば、文化交流や日本文化の見直しや、評価・発掘に通じるわけで、最近ではその傾向が強くなって来ている。ロンドンの夏目漱石記念館や、東ベルリンの森鷗外記念館や、西ベルリンの旧日本大使館の建物の復旧や文化施設としての再建などにも、その機運の一端を知ることができよう。

また現代文学の特徴の一つとして、戦争文学があげられる。いわゆる第二次大戦を含めて、終戦前の戦争文学では、戦争の本質への洞察や、文学としての完全燃焼を欠いて、ルポルタージュや安易なヒューマニズムに頼る文学が多かった。しかし、戦後に生み出された戦争文学には、凄惨な戦争の現実からの時間的経過をへて、素材の取り扱い方が深められ、文学作品としての練り上げ方が高まった作品が生み出されるようになった。広島・長崎の原爆の惨禍も、日本と日本人の痛烈な体験であっただけに、それらを素材とした世紀の文学としての重量を持った作品が生み出された。反核運動の高まりは、日本だけでなく、世界的な拡がりを見せている。そして核状況下の文学が真剣な討議の場に載せられるようになった。また、戦争の実体が、地上や海上・海底に止まらず、むしろ宇宙空間に拡がるにいたって、素材的にもそれらの実体に即した展開を見せる予測の中にある。

日本は、有史以来の初の敗戦を体験することによって、被占領国の運命を甘受することになった。被占領の実態は、即物的、軍事的なものだけに止まらず、精神面においても、深刻であった。その全貌は、戦後四十年をへても、資料的に十全に解明されてはいない。しかし、その傷痕のうずきが、文

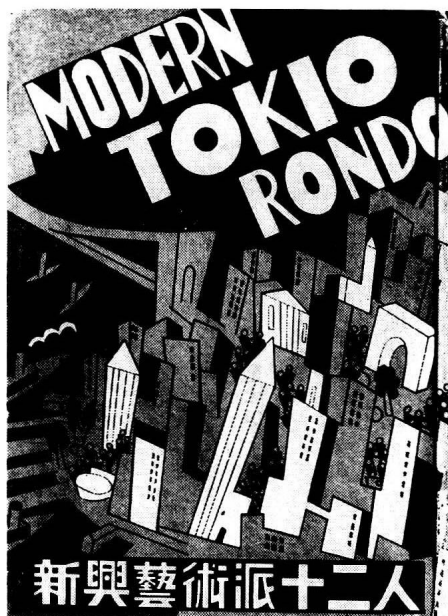
学に影響を与えている認識は、文学者なりの神経で感得されている。占領軍による検閲の問題も、部分的には明らかにされつつある。

日本は短期間に文化の後進国としての、近代化追いつき運動に一応の成功を収めたかに見える。そのことが開発途上国などの日本見直しと、日本に学べとする動向をおりたてたことは否めない。しかし、西欧的近代は、日本にとって何であつたかということが、戦時下においては「近代の超克」として、日本人の知的運命と、戦争の合目的性の観点から大きな論議的となった。そして、日本人の知的運命の策定は、戦後においても、常に古くして新しい問題として「近代の超克」が論じられるという精神風土があつた。横光利一が悩んだのも、西欧的近代と東洋的精神の対決の問題であつた。「旅愁」の未完には、そのような運命的悲劇の翳がある。「近代の超克」問題は、今後も、形を変えて繰り返される課題であるといふことができる。

日本文学の各様式の中では、短詩型、特に俳諧・俳句についての関心が、国際的に高まっている。俳句は日本の特性を持った短詩型であるが、外国にも短詩があることもあつて、特に関心を集めたのである。コンピュータ処理が可能である



「風俗小説論」表紙



「MODERN TOKIO RONDO」表紙



「暗い絵」カバー
(再版からこの絵が表紙となった)



「解放」創刊号表紙

ことから、外国でも研究面での探求が盛んであることは納得される。そのことと平行して、実作面でも関心が高いという国際性があげられる。このことは、歌舞伎や能などの享受が、外国人の間で盛んであることは、別の意味を持っている。

文学が他の芸能と関係深いことは、ただに現代のめだつた特徴とはいえないが、現代においては、その点、多彩な展開が見られる。芸術的感興が、触発するものは、様式上どのようなジャンルに、その本領を発揮するかは、そのこと自体が大きな関心事となる。その意味での多彩・多様化は、文学芸術としての文学作品が強く思想性にかかわる点の、若干の模様変わりがもたらしたものと考えることができよう。文学と演劇との親近性は、つとに指摘されるところであるが、そのみに止まらず、文学と映画・絵画・劇画・書・建築・音楽など、様々のバリエーションが、楽しい雰囲気を生み出している。文学の持つ特性が、その機能を回復するきざしがあり、将来の命運がどうなるかについての関心が寄せられている。

文学にいどむ方法論が、一筋縄ではゆかなくなったことがあげられる。方法論意識は、国文学領域が、外国文学研究者などにくらべて、比較的苦手として来た領域である。しか

し、外国からの刺激もあつて、国文学者が、この問題についての関心と研究をよけて通ることができなくなったことがあげられる。国際学会などで発言の機会が多くなったことも、一助となつていと思われる。単なる受け売りでなく、工夫をこらしての、深化・発展が望まれている。

川端康成のノーベル文学賞受賞や、三島由紀夫や遠藤周作の文学への海外での注視が、日本文学全般（古典から近代・現代まで）への関心を高めていることがある。その刺激が、国内の研究者へのはねかえりとなつていことも無視できない。現代作家の作品の翻訳についても、意外なとり上げ方が見られる。翻案・翻訳は、近代文学を豊かならしめたが、今や日本の現代作家の翻訳が商業ベースに乗る現象が一部に生じている。

文壇の崩壊や、ジャーナリズムのあり方とも関連するが、中央偏重の傾向が是正されて、地域分散、個性化、多様化の模様が見られる。そのことは、文学の底辺を拡げることでもあるので、歓迎すべき現象だといふことができよう。敗戦後の焼土の中から、文壇の解体現象に力を得て、無名の新人たちが、実力本位で作品発表の場を獲得したような様相の再版状態が見られる。特にその点は、女流作家において顕著である。